

楽読
(ラクヨミ) Vol. 1,590

市場急落局面にみる「株式のチカラ」 ～これまでの米国株式を例に考える～

楽読 (ラクヨミ)

nikko am
fund academy

新型コロナウイルスの世界的な蔓延に伴う景気後退懸念などから、株式市場は、これまでにない大きな変動に見舞われています。米株式市場を例に、2000年以降の主な急落局面を見ると(以下グラフ)、今回の下落は、リーマン・ショックに次ぐ大きさとなっています(資料作成時点)。また、今回の特徴として、市場変動の激しさが挙げられます。下落に要した日数を見ると、今回はわずか1ヵ月程度で3割超の下落となっており、リーマン・ショック時の約7ヵ月に比べても、今回がいかに短期間で急落であるかがわかります。

このように株式は、投資家心理が急速に悪化する局面では、変動率が高まる傾向にあり、近年はその傾向が強まりつつあります。ただし、変動率が高いからこそ反発のチカラも大きい資産といえます。以下で、各局面の最安値からの騰落率を見ると、1年後には概ね3割超の上昇を遂げ、その後も上昇基調となるなど、いずれにおいても反発の強さがうかがえます。これは、株式が元来、企業業績を反映する資産であり、経済活動や企業の取り組みなどによって業績の回復・成長が見込まれる限り、中長期的な値上がり期待されることから、市場急落後に投資家心理が落ち着き、経済が回復に向かうにつれ、成長期待が株価に反映されたものと考えられます。

足元は、依然として感染収束が見通じづらく、予断を許さない状況です。一方で、震源地の中国では、経済活動が正常化に向かいつつあるほか、イタリアなどでも感染拡大ペースに落ち着きがみられ、市場では、収束後を見据える動きもみられ始めています。当面は、感染動向や景気への影響を見極める展開が想定されますが、同時に、資産運用の一部に活用できる有効な資産として、落ち着いて株式と向き合う機会でもあると考えます。

【S&P500とVIX指数の推移】



	① ワールドコム・ショック	② リーマン・ショック	③ 欧州債務危機など 米国債格下げ	④ チャイナ・ショック	⑤ コロナ・ショック
最大下落率 (最大下落率となった日)	-33.8% (2002/10/9)	-48.2% (2009/3/9)	-19.4% (2011/10/3)	-11.2% (2015/8/25)	-33.9% (2020/3/23)
それまでの高値から 最安値までに要した日数	278日	210日	157日	15日	33日
最安値からの騰落率	6ヵ月後	11.5%	52.7%	28.6%	4.5%
	1年後	33.7%	68.6%	32.0%	16.3%
	3年後	54.0%	102.6%	79.0%	53.9%
下落前の最高値に 回復するまでに要した日数	764日	694日	144日	70日	—

(注) 騰落率は、最大下落率となった日を起点にした6ヵ月後、1年後、3年後の騰落率。
休業日の場合は前営業日の値を用いています。

(信頼できると判断した情報をもとに日興アセットマネジメントが作成)

※上記は過去のものであり、将来を約束するものではありません。

日興アセットマネジメント

■ 当資料は、日興アセットマネジメントが情報提供を目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解および図表等は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■ 投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。